

令和 5 年 10 月 26 日現在

機関番号：35305

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02465

研究課題名（和文）教育テレビはいかに幼児教育領域 音楽・リズム・身体表現 を映したか

研究課題名（英文）The effects of the educational television programs on early childhood music education

研究代表者

葉口 英子（Haguchi, Hideko）

ノートルダム清心女子大学・人間生活学部・准教授

研究者番号：20434532

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、NHK教育テレビでは学校放送「幼稚園・保育所の時間」の音楽番組に着目し、長期にわたって幼児に向けた“歌・音楽・リズム”に関する教材幼児向けの歌や音楽が、教育テレビを通じてどのように提供されたのか、通史として明らかにした。

番組が提供した歌や音楽は、幼稚園指導要領が示す理念としての教材性を保ちつつも、一方で教科主義とは一線を画す形で、試行された経緯が見受けられた。放送教育の普及と振興を背景に、番組は保育現場での集団視聴の推進がはかられた。教育テレビ番組を通じた幼児向けの歌や音楽が、各時代の幼児に対する音楽教育観や放送教育観を構築したメディアテキストとして存在したことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果の学術的意義は、これまで十分に解明されていなかった半世紀に渡るNHK教育テレビの幼児向け音楽番組に関する内容および変容過程の実態を通史として詳細に解明した点である。次に、公共放送であるNHKがテレビを通じて提示してきた多くの幼児向けの歌や音楽が、幼稚園指導要領に基づきながらも、それらがいかなる教材的あるいは教育的意味を持つものであったのか、を検証した点である。本研究の成果の社会的意義は、番組のありようから各時代の幼児に対する音楽教育観が一端が明らかとなり、戦後日本の幼児音楽教育の軌跡の一部を示すことができた点にある。

研究成果の概要（英文）：Through music shows in its “programs for kindergartens and nursery schools” programming block, for years NHK Educational TV broadcasted educational material related to song, music, and rhythm aimed at preschool-aged children. The objective of this research is to study the music shows in the “programs for kindergartens and nursery schools” programming block, which have yet to receive adequate attention, and take an extensive look at how educational television delivered songs and music for young children through a comprehensive history.

With the spread and popularity of broadcast education, the shows were promoted for group viewing in nursery school settings. The paper ultimately reveals how the songs and music for preschool-aged children offered by shows on NHK Educational TV functioned as media texts that shaped views on music education and broadcast education for young children throughout the ages.

研究分野：メディア論

キーワード：幼児とテレビ 幼児向け音楽 「幼稚園・保育所の時間」 NHK教育テレビ 放送教育 学校放送 幼児と歌

1. 研究開始当初の背景

NHK 教育テレビ『幼稚園・保育所の時間』枠の音楽番組は、学校放送というその特殊な性質から、文部省（文部科学省）が制定した幼稚園教育要領と厚生労働省の保育所保育指針に基づく形で編成されてきた。この番組は、幼児向けの〈音楽・リズム・身体表現〉のありようをテレビ映像という具体的な実践を示す内容として、長期に渡って放送してきた経緯をもつ。しかし、従来の音楽教育や幼児教育の領域では、この番組に向けられる関心は低く、番組の実態すら把握できていない状況があった。

前代の幼児向けの歌・音楽がテレビを通じた映像テキストとしていかなる特性をもって提示されたのか、また各時代の中でいかなる媒介作用を持ち得たのか、という問いに対し、情報技術に伴うメディア環境の急速な変化とともに、テレビを中心としたメディア構造の変容が顕わとなった現在、改めて検証する必要があると考えた。

2. 研究の目的

NHK 教育テレビの「幼稚園・保育所の時間」の音楽番組は、学校放送という性質上、文部省制定の幼稚園教育要領の領域〈音楽リズム〉（1956 年～）、〈表現〉（1989 年～）に準拠した制作を通じて、番組のタイトルや内容の変更を重ねてきた経緯を持つ。

本研究の主な目的は、約半世紀に渡って放送されたこれらの番組を対象とし、これまで十分に言及されていなかった番組内容や実態を検証し、その特色と通時的変遷を解明することにある。また、これらの番組の制作・受容の側面から、メディアテキストとしての媒介作用を明らかにする。視聴覚メディアの特性をもって幼児向けの歌や音楽やリズムをテレビ教材としていかに具現したのかを検証する。

3. 研究の方法

1958 年から 2006 年までに放送された番組に関する資料・情報収集をおこない、番組の内容および制作過程を明らかとした。番組内容については映像データに基づいた情報が皆無に近いため、『テキスト』や放送教育関連の雑誌による活字資料に加え、「NHK 番組アーカイブス学術利用トライアル」を 3 期分利用し、当時の番組映像 320 本のテキスト分析から内容と実態の把握を進めた。

考察の手続きは、1 先行研究、2 概要、3 成立と浸透の経緯、4 受容、5 内容、6 制作、の項目に沿って実施した。各段階の進捗状況に従い、論文や学会発表にて成果を公表した。

4. 研究成果

(1) 先行研究とその課題

本研究のテーマに関連する先行研究は、放送教育、学校放送、子どもとメディアを扱う領域にある。放送メディア研究の分野では、NHK 放送文化研究所が、子どもや幼児向けの NHK 番組や学校放送の視聴状況・メディア利用に関する調査を定期的に行っている。このテーマに関しては、研究所の小平さち子の一連の研究成果の蓄積がある。

教育心理学では、村野井均による『子どもはテレビをどう見るか』（2016）、『子どもの発達とテレビ』（2002）など、幼児のテレビ理解や視聴行動の特徴を明らかとしている。また、メディア論では、佐藤卓己（2008）の『テレビ的教養』が、メディア史として戦後 NHK 教育テレビの歴史的な変容を。

本研究テーマを扱う大半の先行研究が放送教育の分野にあるもので、それらはNHK 教育テレビを保育園・幼稚園での利用にまつわる実践報告や手引書となる。たとえば、久野『放送教育ハンドブック』（1977）などは幼稚園・保育所での番組利用を推進するための手引書として実践例を紹介する内容であり、また小川・小笠原編『幼児放送教育の研究』（1989）は、テレビ番組を幼児の情報環境として捉え、その情報が幼児にふさわしいものであるか、教材としての評価を中心に論じる。

一方、従来のオーディエンス論やテレビ論において、本テーマを扱った先行研究は皆無である。そこで、NHK 教育テレビの「幼稚園・保育所の時間」の音楽番組を放送教育といった文脈や視点のみならず、大衆文化、あるいは子どもとメディアといった視点から捉え直す必要があると考えた。

(2) 番組の成立と変遷

1953 年、NHK 東京テレビ局の開局に伴い、小学校低学年対象番組の『リズム遊び』が、1957 年に幼稚園対象となったため、総合テレビでは「幼保の時間」枠として、『みんないっしょに』、『人形劇』、『リズムあそび』の番組が 1 日 1 回放送された。このとき、リズムや音楽に関連する幼児向けの教育番組として、小学校低学年から幼児向けに分化したといえる。

1959 年、学校放送は教育テレビに移行し、領域〈音楽リズム〉に対応した番組『リズムあそび』は消滅する。「幼保の時間」番組は、幼稚園・保育所の施設内で幼児を指導するためのカリキュラムの教材として制作するとの方針が一層明確となった。番組編成は、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」に準ずる形となり、1 日 4 本（土曜日 3 本）の放送形態となった。

1960年のカラー放送開始より、放送教育を学校現場に導入する機運がさらに高まる中、64年「幼稚園教育要領」改訂の中に「放送」という文言が登場し、視聴覚教材の1つとして、ラジオ・テレビという放送教育の導入が明記された。

「幼保の時間」の音楽番組は、『ドレミファ船長』（63-66年）、『なかよしリズム』（66-88年）、『プルプルプルン』（89年）、『ともだちいっぱいうたってあそぼ』（90-94年）、『うたってオドロンパ』（95-97年）、『うたっておどろんぱ SING ALONG! DANCE ALONG!』（98-2000年）、『うたっておどろんぱ!』（2001-05年）、『あいので』（2006年）とタイトルと内容の変更がありながら、長期に渡って、幼稚園・保育所でのテレビ教材として、幼児向けの歌・音楽・リズムを継続して、提示し続けてきた。

(3) 番組内容と特色

番組のねらいやコンセプトは各時代の番組によって変容するが、主には幼児のリズム感覚を養うことがねらいとされた。そのため番組では幼児のリズム感覚を刺激し、より豊かな音楽性を身につけるよう、音楽の楽しさを伝えるというコンセプトが継続して見受けられた。

一連の番組は、幼児のリズム感覚を養うという目的のもと、出演者が振付で歌ったり、楽曲に合わせダンスしたりというパフォーマンスや動き重視のバラエティーショー型の構成でテンポよく進行した。15分間の番組内容は「歌、踊り、遊び」で編成され、出演者が振り付けとともにテンポよく歌ったり、踊ったりするパフォーマンスや動き重視の内容である。当初は「リズム」を強調するあまり、幼児向けとしては斬新な実践も見受けられたが、基本は生身の人間の振付や踊りを伴う歌唱が中心となった。

またペーパーアニメ、クレイアニメなどのアニメーション、あるいは実写とアニメーションを合成した映像に伴う歌も紹介された。歌や音楽はオリジナルソングをはじめ、童謡、わらべうた、外国民謡、楽器・手作り楽器の演奏などバラエティに富んだジャンルであった。

初期の頃からの「生・丸ごと、継続」の視聴原則に基づくライブ感のある演出は、スタジオでの収録放送への移行後もアドリブの要素を含む演出で実践され、視聴との同時性が強調された。

さらに、お兄さん、お姉さん、おじさん、キャラクターといった出演者の演出には幼児に親近感をもたせる仕掛けが数多くあった。出演者の魅力やパフォーマンスの力量に依存する傾向も顕著だったであったが、それぞれの役割と音楽表現との結びつきを効果的に提示した。出演者によるテレビの前の“お友達”や“みんな”という呼びかけの常套化は、幼児に対しテレビの存在を認識させ、ブラウン管越しに、番組さらにはテレビそのものに愛着を抱かせる演出の一つとして定着した。

なかでも最も長期間放送された1966年から1988年の『なかよしリズム』では、番組タイトルは変化がないものの、出演者・キャラクターや編成・内容が10回も変わった。この時期の制作者のコメントには、“おもしろいことが第一”といった標語も掲げられ、出演者同士あるいは人形との会話にはユーモアを含むコントのような演出も見受けられた。他にも人気のあるお笑い番組やアイドル文化を流用するなど、子ども文化の動向や流行を意識したエンターティメント性を強調する面もあった。

半世紀に及ぶ番組の軌跡には、モノクロからカラーへの移行、収録や編集に関連した放送技術の進展があった。また幼児をめぐる音楽教育観や子どもの歌の変容も確認できた。

(4) 番組の浸透と受容背景

「幼保の時間」の番組の進展は放送教育の振興と連動した。当時の放送教育運動はラジオからテレビへと引き継がれ、放送教育や視聴覚教育を推進する論者の言説がその制作にも強い影響力を持った。

1958年、『幼児とラジオ・テレビジョン』が発行された後、文部省やNHKによる番組利用を促す手引書や解説書の出版が相次いだ。また1955年発足の日本放送教育学会『放送教育研究』、1964年発足の日本視聴覚教育学会（前身は視聴覚教育研究協議会1954年～）『視聴覚教育研究』といった雑誌記事には、「幼保の時間」の音楽番組の活用を奨励するために、教育実践者の報告や実例の紹介が数多く掲載された。

「1960年代には、質量ともに幼児向け番組が急成長し、放送利用教育を普及させるための全国規模の研究活動にも支えられて、幼稚園・保

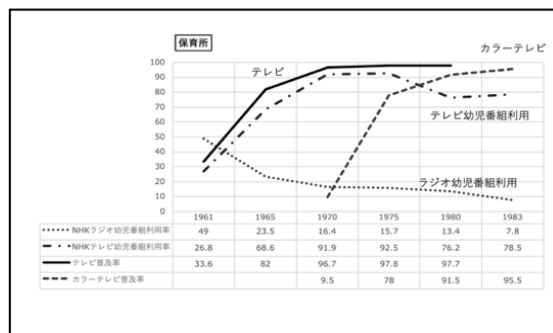
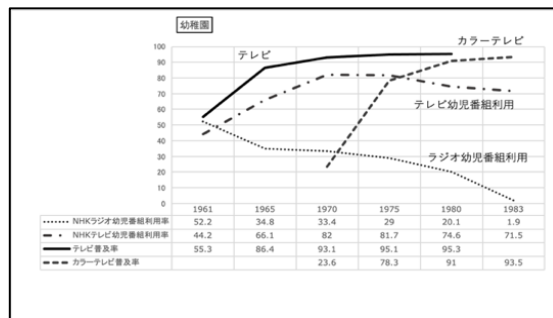


図1 幼稚園・保育所における幼児番組利用率および設備普及率（全国放送教育研究会連盟編、1986、p.436のデータを抜粋して筆者作成）

育所での利用は急速に広がった」(小平, 2016, p. 15)との指摘にあるように、文部省、NHK、地方教育委員会で構成された組織の動きが活発化した。

1958 年以降、全放連(全国放送教育研究連盟)の施策で教育現場にはテレビが一斉に設置された。そのため 1965 年の全国幼稚園・保育所の白黒テレビの普及率が 80%、1980 年のカラーテレビは 90%を超えた。幼児人口の増加も伴い、「幼保の時間」の利用のピークは 1970 年から 75 年頃である(図 1)。利用の仕方や実態はさまざまであるものの、幼稚園・保育所ともに 80~90%という高い利用率を示した。また、1969 年、全放連の傘下に公私立の幼稚園・保育所別に研究団体が立ち上がったのを機に、幼稚園・保育所の指導者に向けて、番組を指導案に取り入れ、集団視聴による教育的活用を推進する動きが本格化した。

(5) 教育テレビと幼児

放送教育運動を推進した「学校放送の父」と称される西本三十二は、幼児に対する放送教育観として「幼児の時代には、あらゆるものが教育の対象となり、娯楽も教養の未分化の状態にあるから、幼児を対象とする番組は、すべて教育放送とする」(西本, 1960, p. 154)と主張した。また、初期の『幼児とラジオ・テレビジョン』(青木, 1958)では、「幼児の段階では、ラジオ、テレビを楽しく聞き、楽しく見ることを第一義と考えており、それが長い間のつみかさねによってよい結果をもたらすことを期待する」(青木, 1958, p. 32)とある。幼児にとってテレビ視聴という行為自体が生活経験であり、その経験を広げていくことが生活を豊かにする、というこの考えは初期の制作側の姿勢にも反映された。そのため、教育主義、教科主義とは一線を画した内容へと傾斜が顕著な時期もあった。

一方、保育現場でも幼児番組の利用に際して、「喜んでみたり聞いたりするような態度を養うとともに、幼児の経験を広め、豊かな情操をはぐくむ。放送利用の効果は、継続的に積み重ねられていくときもっとも力強いものになる。だからテレビに楽しく接する態度を育てる」(幼児文化研究グループ, 1966, p. 61)ことが重要だと説かれた。当時の幼児番組では「テレビはともだち」という標語が掲げられた。この言葉が象徴するように、制作・受容の場双方において、テレビへの親近感や愛着の醸成が、幼児番組の一義的な役割という認識が共有されていたと考える。

したがって、番組の一連の変遷からは、テレビという媒体に適した幼児の歌・音楽の新しい表現や型を創作し、定着させていく過程も明らかとなった。その過程はいわゆる教育主義、教科主義とは一線を画した形で、テレビを介した音楽や歌を通じていかに幼児を惹きつけ、親しませるかを一義的なもの捉え、試行するものであったともいえる。

(6) 総論および今後の課題

本研究を通じて、テレビが社会や教育現場に影響力を持ったメディアとして浸透する時期と並行して、当番組が幼児教育の音楽を具現したテレビ教材として幼稚園・保育所での実践へと結びつけるべく、作り手や指導者主導による多様な取り組みがおこなわれてきた歴史が明らかとなった。

一連の番組では、幼児に向けた歌・リズム・音楽を教材、あるいは映像としていかに提供するかという問いに対し、テレビという媒体の特性を生かしながら、同時代の文化的想像力を働かせ、試行を繰り返しながら応えてきた軌跡が明らかとなった。幼児を取り巻くメディア環境が大きく変化した現在、このかつてのテレビ時代の幼児向け音楽番組の蓄積と軌跡が、映像が主となっている現在の幼児向けの歌・音楽のあり方や音楽教育に対しても何らかの示唆が得られるものだと考える。

本研究の今後の課題として、昭和初期のラジオ放送に遡り、幼児向け音楽番組が幼児文化に与えた影響や果たした役割を放送史全体から問い直したいと考える。学校放送の対象とする“幼児”という被構築性がいかに番組制作、さらにはメディアテキストとしての番組内容を通じて構成されてきたのか、今後も調査と研究を重ねたい。

<引用文献>

- ①青木章心編(1958)『幼児とラジオ・テレビジョン』日本放送教育協会
- ②小川博久・小笠原喜康編著(1989)『幼児放送教育の研究』川島書店
- ③小平さち子(2016)「幼児教育におけるメディアの可能性を考える」『放送研究と調査』66(7), NHK 放送文化研究所, pp. 14-37
- ④佐藤卓己(2008)『テレビ的教養』NTT 出版
- ⑤全国放送教育研究会連盟・日本放送教育学会『放送教育 50 年』(1986) 日本放送教育協会
- ⑥西本三十二(1960)『テレビ教育論』日本放送教育協会
- ⑦久野登久子(1977)『放送教育ハンドブック』ひかりのくに
- ⑧村野井均(2002)『子どもの発達とテレビ』かもがわ出版
- (2016)『子どもはテレビをどう見るか』勁草書房
- ⑨幼児文化研究グループ編(1966)『幼児の放送教育』フレーベル館
- ⑩テキスト『NHK 幼稚園保育所の時間』日本放送出版協会 45, 46(2), 47(2), 48(2-3), 49-62, 63(1-3, 9-12); 1989-1995, 1996(1-3), 1997(9-12), 2001-2004, 2005(9-12), 1970-2005 年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 葉口英子	4. 巻 45
2. 論文標題 テレビ時代の学校放送の理解に向けたメディア論への接近	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ノートルダム女子大学紀要人間生活学・児童学・食品栄養学編	6. 最初と最後の頁 22-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 葉口英子	4. 巻 第24巻第2号
2. 論文標題 テレビ時代の放送教育にみる幼児番組の成立と浸透 —NHK「幼稚園・保育所の時間」の音楽番組を事例として—	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 環境と経営	6. 最初と最後の頁 73-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 葉口英子	4. 巻 第25巻第1号
2. 論文標題 テレビの幼児向け音楽番組はいかに制作されたか —初期のNHK教育テレビ「幼稚園・保育所の時間」を事例として—	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 環境と経営	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 葉口英子	
2. 発表標題 「幼保の時間」の音楽番組にみる領域 音楽リズム から 表現 への変化の対応	
3. 学会等名 第17 回子ども学会議	
4. 発表年 2021年	

1．発表者名 葉口英子
2．発表標題 NHK教育テレビ『なかよしリズム』にみる 幼児向け音楽に関する考察
3．学会等名 日本教育メディア学会第28回年次大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 葉口英子
2．発表標題 テレビ時代の幼児向け音楽番組を再考する―『なかよしリズム』（1966年-1987年）を事例として―
3．学会等名 日本子ども社会学会第26回全国大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 葉口英子
2．発表標題 教育テレビは幼児にいかなる歌・音楽を与えたか―『なかよしリズム』を事例として―
3．学会等名 第16回子ども学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 葉口英子
2．発表標題 テレビ時代の幼児向け音楽番組を再考する―『なかよしリズム』（1966年-1987年）を事例として―
3．学会等名 子ども社会学会
4．発表年 2019年

〔その他〕

教育テレビ番組『幼稚園・保育所の時間』の音楽番組の内容分析 —「うたってオドロンパ(後期)」から「あいので」にみる音楽とパフォーマンス分析—、NHK番組アーカイブス学術利用トライアル2022年度前期報告書

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------